

モーツァルト：歌劇「皇帝ティートの慈悲」K.621 序曲

《皇帝ティートの慈悲》は、《魔笛》とともに W.A.モーツァルト(1756-1791)最後の年にあたる 1791 年に作曲されたイタリア語のオペラである。

ローマの皇帝ティートの妃に選ばれると思い込んでいた先代皇帝の娘ヴィッテリアが、自尊心を傷つけられた怒りから、自分に好意をもつセストにティート殺害の計画を立てさせる。その後ティートはヴィッテリアを妃にすると決めるが、計画は実行される。しかしティートは生きていた。セストは有罪となり、ティートは死刑執行の命令書に署名しなければならないが、友人セストを救済する決断をする。セストはヴィッテリアをかばうため真実を語るができないうが、セストへの罪悪感からついにヴィッテリアはティートに全てを告白する。すべてを許した慈悲深いティートを人々は賞賛する。序曲は八長調、4 分の 4 拍子、アレグロの快速な音楽で、「ドシラソファミレド」のように音階で下降する旋律が印象的である。劇的な展開もみせながら、オペラの結末を予告するように晴れやかに終わる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、

トランペット 2、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記